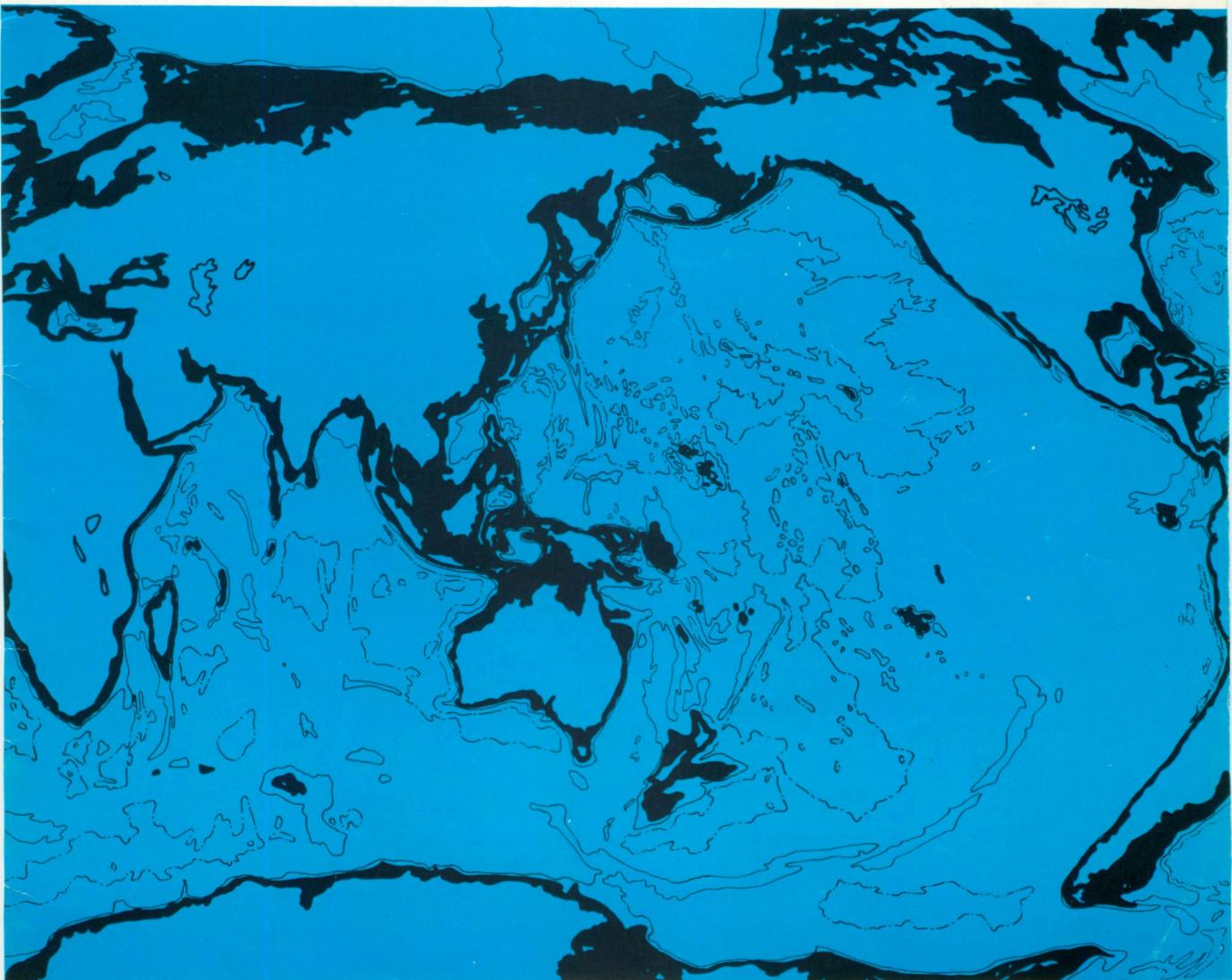


# 遠洋水產研究所要覽



# 遠洋水産研究所

## I. 沿革

昭和4年（1929）以来唯一の国立水産試験研究機関として多くの功績を残してきた農林省水産試験場は昭和24年（1949）6月1日廃止され、代って新に全国を8海区に分けて、各区毎に国立の水産研究所がおかれ、各海域の水産資源を対象とする特色ある研究が進められた。

しかしながら、この間昭和27年（1952）の講和条件により漁場制限の撤廃を契機として日本漁業は飛躍的に海外漁場に進出し、多くの国際漁場において諸外国と競合するに至る。すなわち、昭和28年（1953）には日米加漁業条約、31年（1956）には日ソ漁業条約、32年（1957）には、おっとせい暫定条約等が締結された。その後、大陸棚条約の批准国が増加し、また「漁業および公海の生物資源保存に関する条約」が発効し、沿岸国の排他的な漁業専管水域の一方的実施等によって日本漁業も多くの規制をうけるようになった。

このような日本水産業をめぐる内外諸情勢の変化に即応するため、これまで各水研に分散していた国際漁業の研究部門の組織を清水市に集めて、昭和42年（1967）8月1日遠洋水産研究所が設立された。



序 舎 全 景

## 研究の現状

研究の対象は、さけ・ます・かに（北洋資源部）まぐろ・かじき等暖流系遠洋浮魚類（浮魚資源部）北洋および遠洋底魚類、おottoせい・鯨類（底魚海獣資源部）の資源研究と遠洋漁場における海洋の物理化学的研究（海洋部）におかれている。

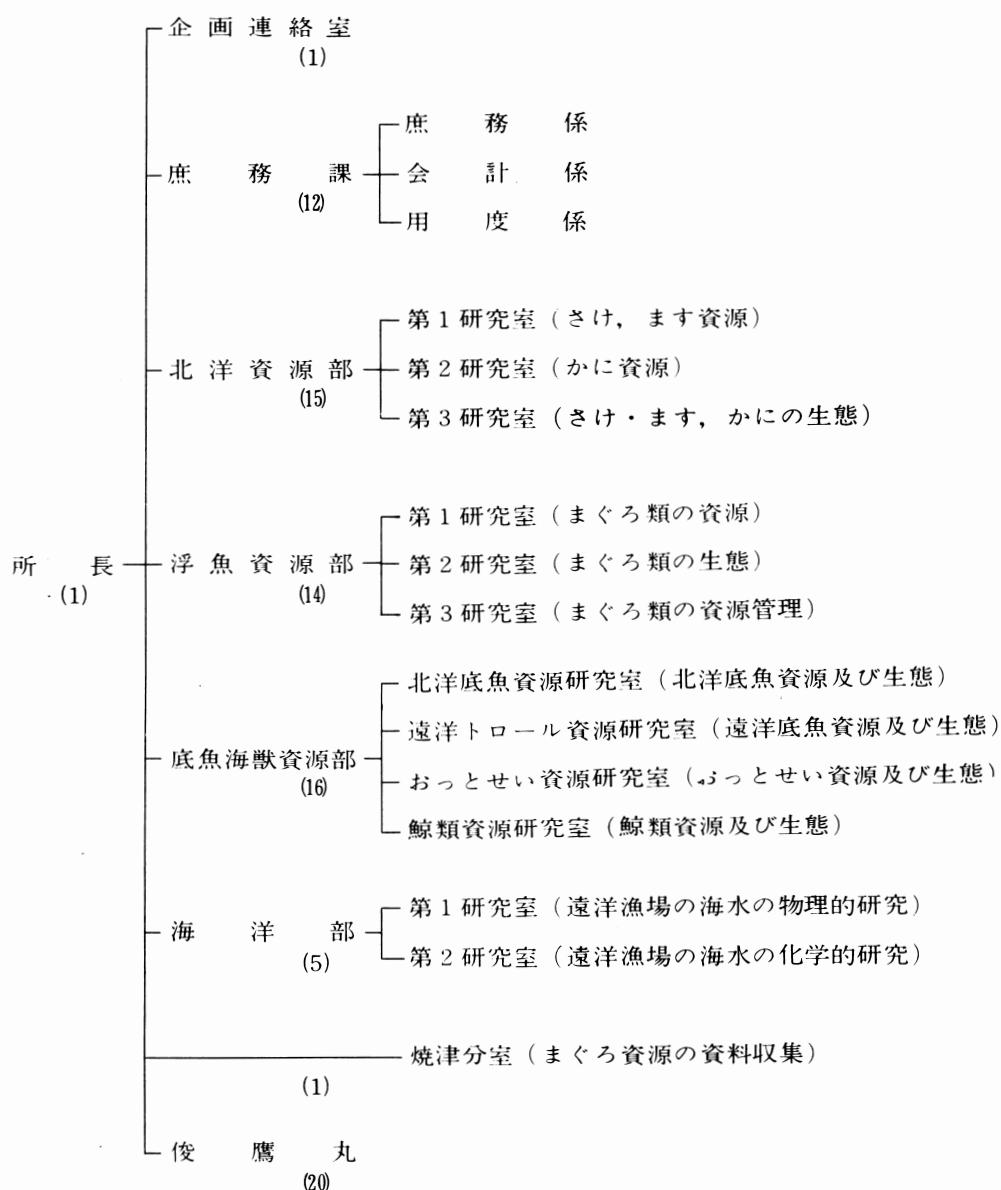
資源研究の目的は資源の合理的管理に資することにあるが、当面の目標は、資源の合理的利用並びに漁業の生産性向上のために適時的確に資源の現状診断と変動予測を行なうことにおいている。各部各研究室の研究には既往の経過、研究陣容等の関係上、研究の精粗に差はあるが、基本的には研究対象生物の生態研究、資源の実態即ち系統群の判別、年令、成長、魚群構造、再生産機構等、漁業生物学的諸特性に関する研究及び資源並びに漁業管理技術の向上に関する研究がすすめられている。

特に当所の関与する遠洋漁業は国際性が強く、条約・協定・F A O関係その他もろもろの国際関係に由来する緊急な調査研究が要請されることが多い。

# 組 織

## 機 構 図

職員数 85名



### 企画連絡室

試験研究に関する総合的な企画および調整ならびに連絡を行う。

# 北洋資源部

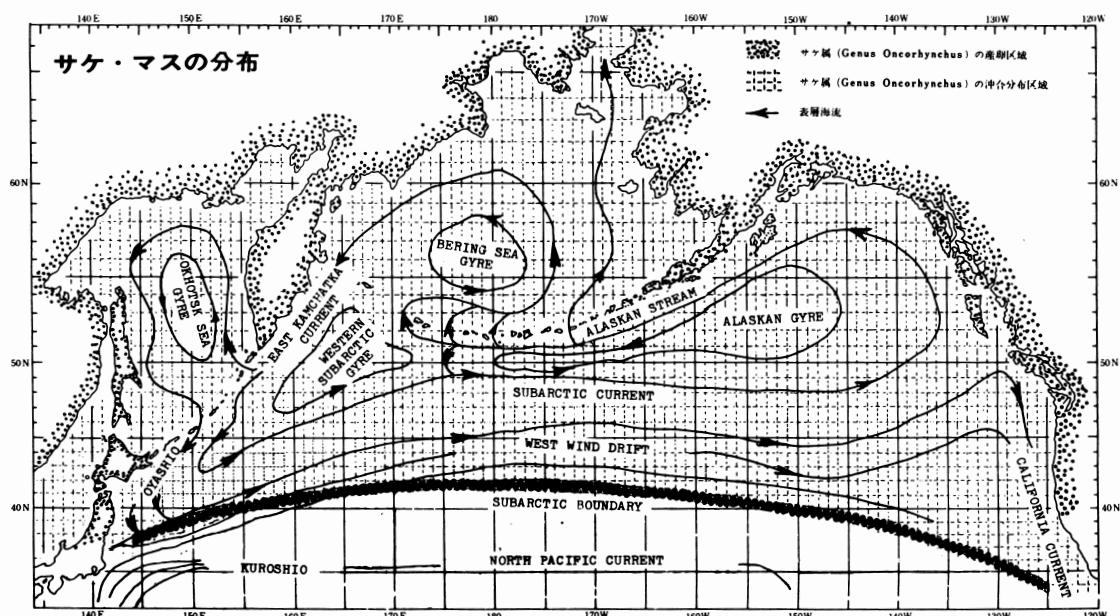
## I. さけ・ます資源および生態の研究

さけ、ます（べにさけ、しろさけ、からふとます、ぎんざけ、ますのすけ）の沖合における分布、回遊、成長、死亡等に関する研究および資源状態の評価と予測



船上のさけ・ます魚体測定

## さけ・ます漁場図



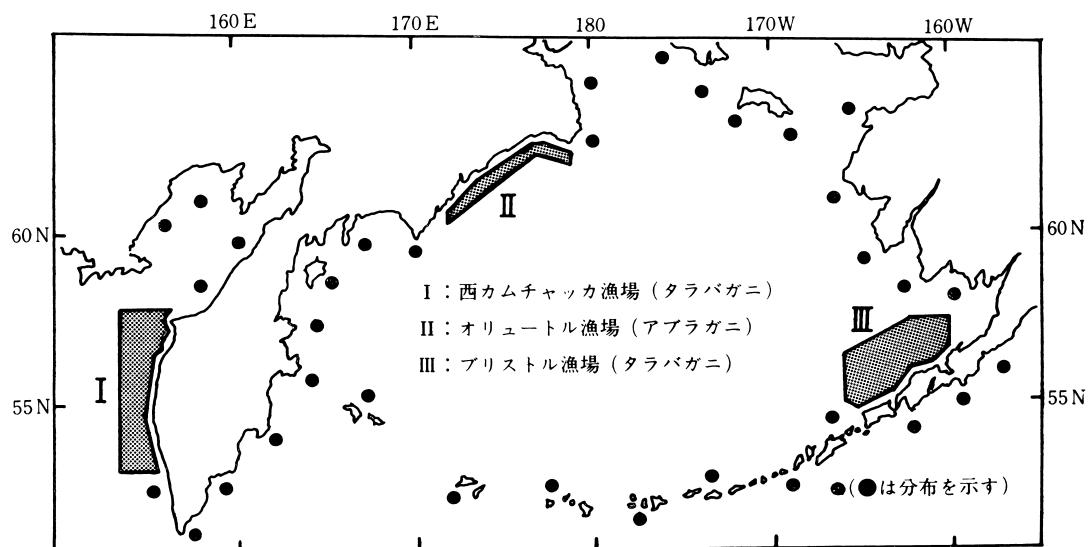
## 2. かに資源および生態に関する研究

西カムチャッカ海域のたらばがに、オリュートル海域のあぶらがにおよびプリストル海域のたらばがにとずわいがにの分布、回遊、生態等に関する研究および資源状態の評価と予測



船上のたらばがに調査

### たらばがに属の分布と規制に関する条約海域



# 浮魚資源部

## 1. まぐろ、その他暖流系の遠洋浮魚類の資源に関する研究

(1) まぐろ・かじき類の系統群の判別

(2) まぐろ・かじき類の各系統群の成長と年齢、魚群構造、死亡率等に関する研究

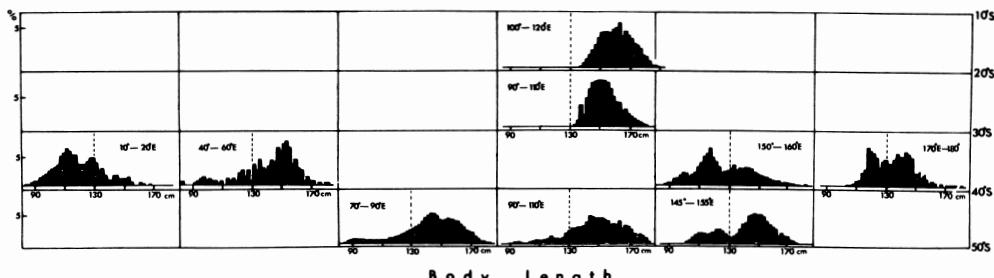
## 2. まぐろ、その他暖流系の遠洋浮魚類の資源管理に関する研究

(1) まぐろ、かじき類の資源の現状診断

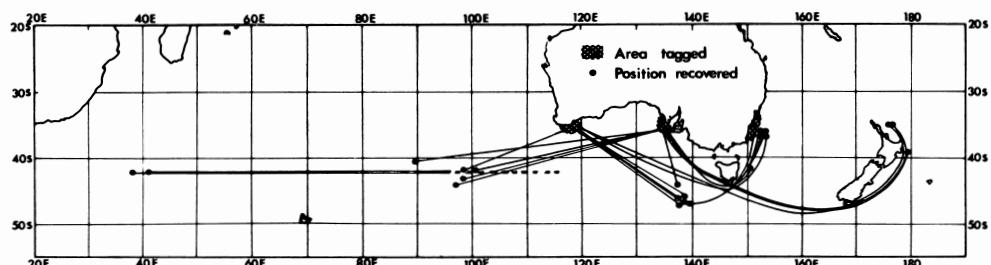
(2) まぐろ・かじき類の資源および漁業管理技術向上に関する研究

(3) 漁業技術の改善に関する生物学的研究

(資源構造に関する研究の一例)

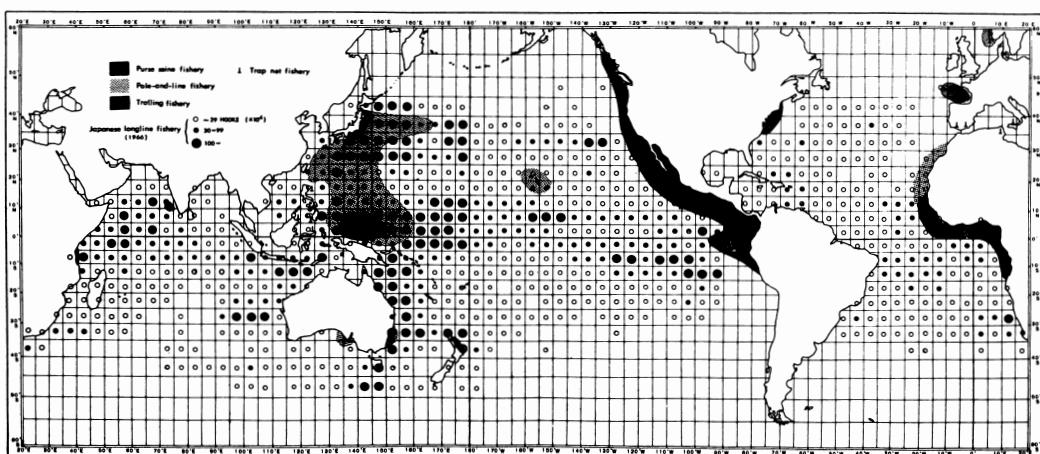


(みなみまぐろの海区别体長組成)



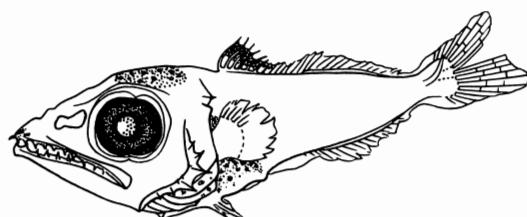
(みなみまぐろの標識放流結果)

## かつお・まぐろ漁場分布



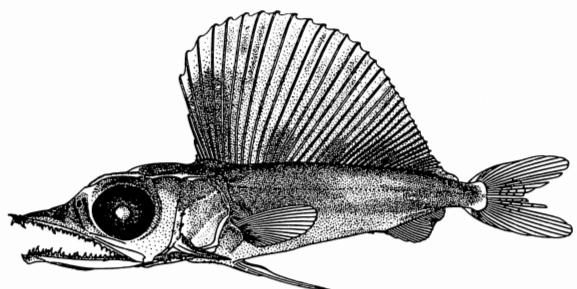
### 3. まぐろその他暖流系の遠洋浮魚類の生態に関する研究

- (1) まぐろ・かじき類の成熟、産卵に関する研究
- (2) まぐろ・かじき類の卵、稚仔の分布、食性、成長に関する研究
- (3) 遠洋水域における biological community の研究

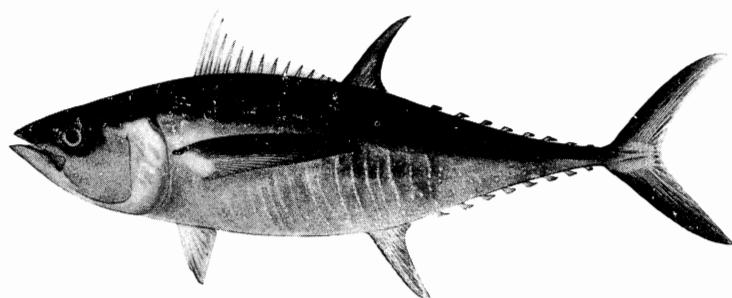


びんなが幼魚

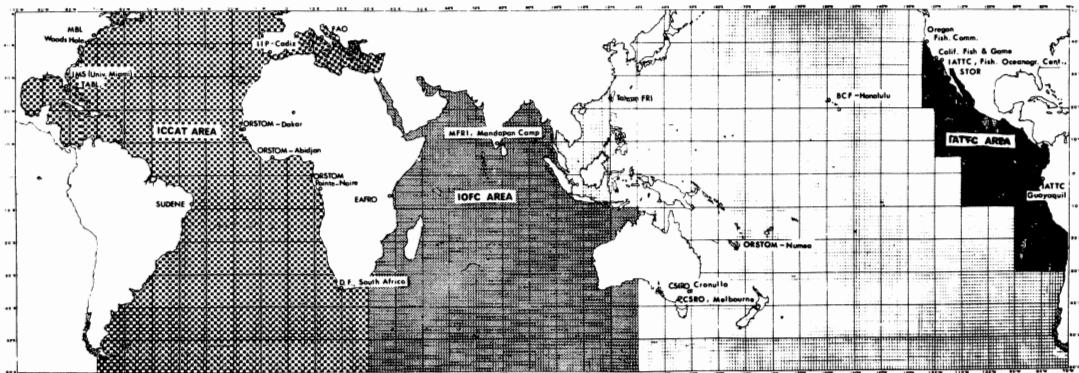
ばしょうかじき



きはだ成魚



### 諸外国のまぐろ研究機関の分布と規制に関する条約海域



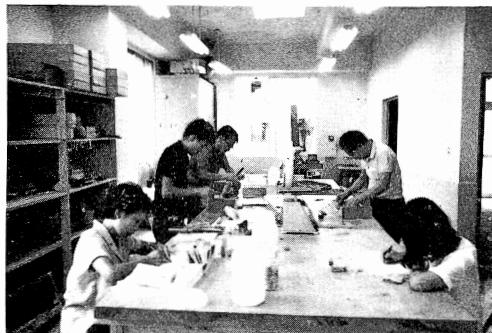
底魚海獸資源部

## I. 北洋底魚類の資源および生態に関する研究

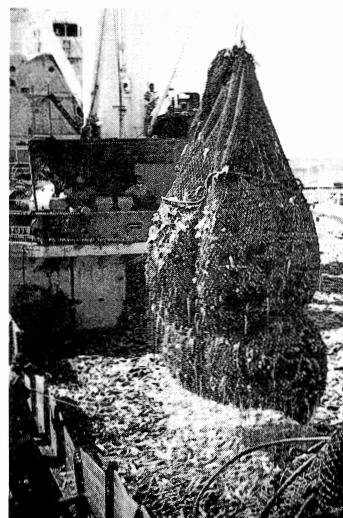
- (1) 主要底魚資源の現状および動向診断
  - (2) 重要魚種の資源生物学的変化に関する研究
  - (3) 漁場の資源構造と季節的变化に関する研究
  - (4) 国際会議対策課題研究

## 2. 遠洋底魚類の資源および生態に関する研究

- (1) アフリカ大西洋岸漁場における主要魚種の資源に関する生物学的研究
  - (2) 同上魚種の資源診断に関する研究
  - (3) 遠洋トロール漁場における主要魚種の固定に関する研究

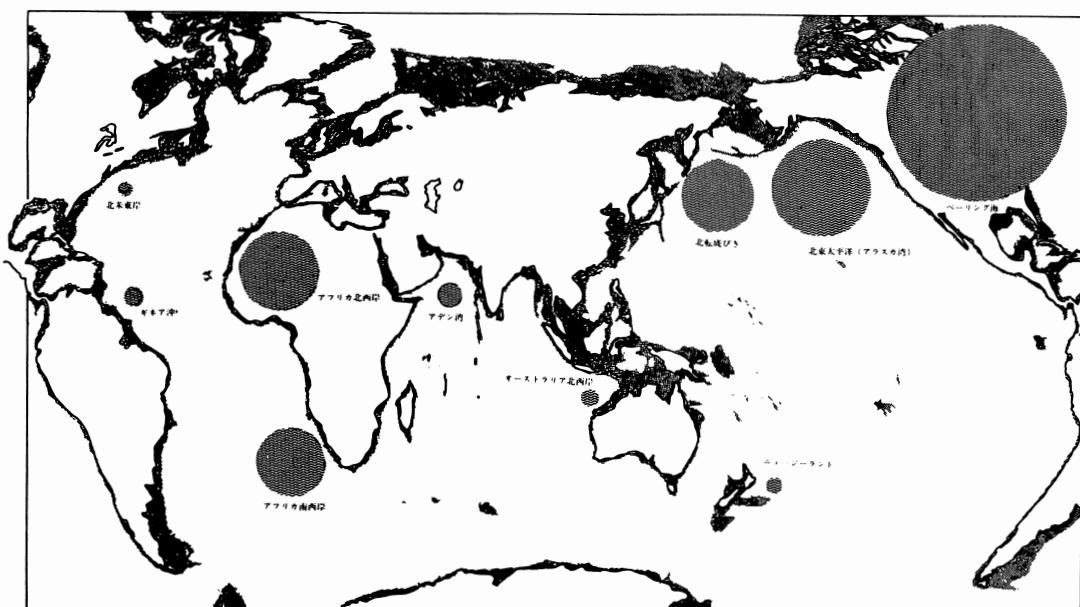


魚体測定



トロールの漁獲

## 遠洋底びき網漁場（1000 m 以浅）と各漁場の漁獲量（昭42）



### 3. おっとせいの資源および生態に関する研究

- (1) おっとせい資源管理方策の確立と資源の有効利用に関する研究
- (2) おっとせいの分布に関する研究
- (3) おottoせいの生物学的基礎研究
- (4) 生化学的手法による系統群の判別に関する研究

### 4. 鯨類の資源および生態に関する研究

- (1) 南氷洋および北太平洋における重要鯨種の資源診断
- (2) 鯨類の生物学的研究
- (3) 鯨類棲息域の環境に関する研究
- (4) 西日本海域における小型歯鯨類（いるか類）による被害とその防除方法に関する研究



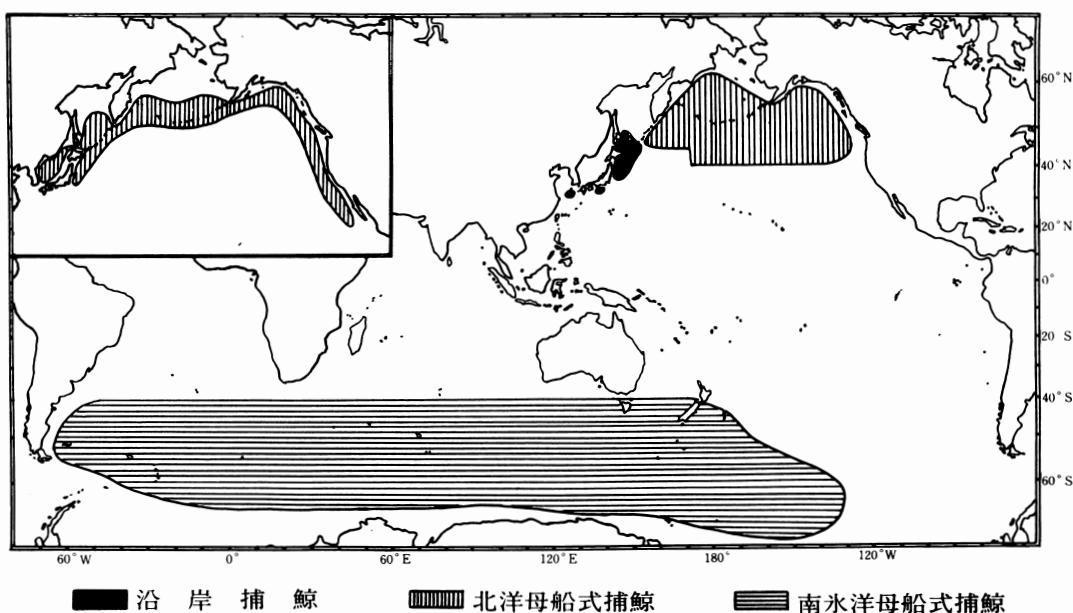
調査船上の捕獲おottoせい



ながすくじらの耳垢栓

北太平洋おottoせいの分布海域

日本捕鯨業の操業海域



# 海 洋 部

- (1) まぐろ類の分布と赤道海流系の変動との関係の研究
- (2) まぐろ類の分布と水塊分析および温度躍層による海洋構造の対応関係の研究
- (3) 魚群探知機によるまぐろ類の垂直分布と海洋構造との関係の研究
- (4) まぐろ類の資源変動と海況変動との研究

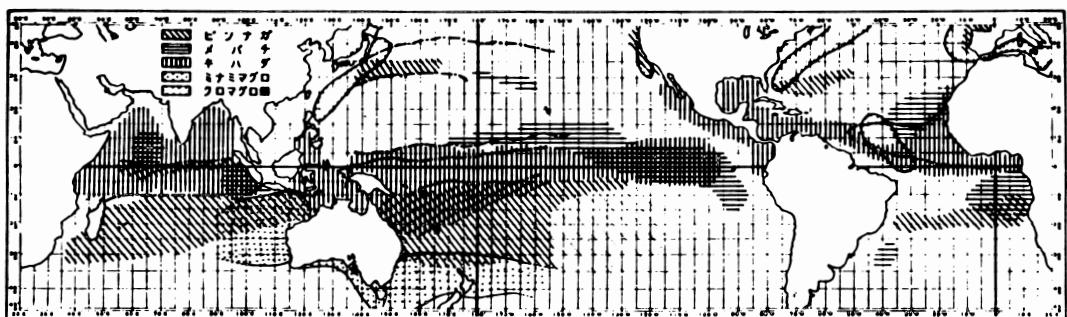


海  
洋  
觀  
測

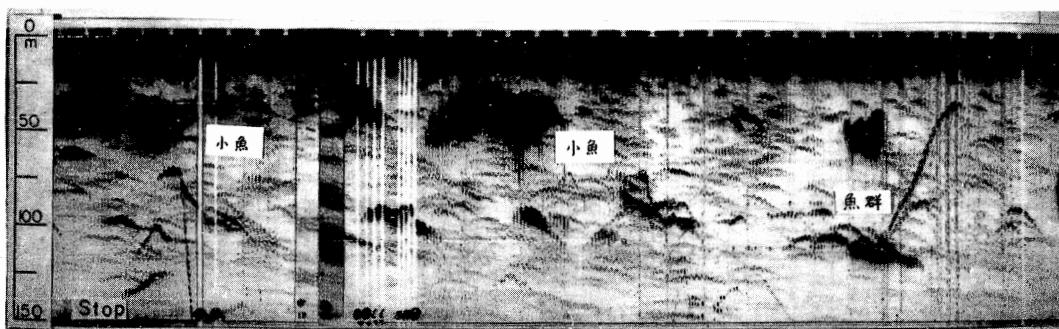


鹽  
分  
測  
定

まぐろ類の分布と海流系（夏型）



魚探に現われたまぐろの影像



## 遠洋水産研究所の研究対象とする漁業の概要

漁業別	漁獲量	海域別漁獲量	漁船数	国際関係
マグロ延縄	482千トン (1966)	マグロ類 太平洋 } インド洋 } 395千トン 太西洋 88 "      (1966)	近海 1,666 遠洋(専) 1,161 } 遠洋(兼) 125 } とう載 37 } (1968-1許可隻数) 2,989隻	I A T T C (全米熱帶マグロ委員会 1950) 日本オブザーバー 大西洋のマグロ類の保存のための国際条約(1966) アメリカ、ブラジル、スペイン、韓国、日本(未発効)
北洋サケ・マス	128千トン (含沿岸) (1967)	A区域 52千トン B区域 62 " 沿岸(1~9月) 13 " (1967)	母船11、独航船 369隻 流網 332隻 延縄 369 " 日本海流網 296 " 日本海延縄 2,840 " 太平洋小型 1,382 " (1967)	北太平洋の公海における漁業に関する日本とソ連邦との間の条約 (通称 日ソ漁業条約 1956 日・ソ) 北太平洋の公海漁業に関する国際条約 (通称 日米加漁業条約 1953 日・米・加) 東部ベーリング海のタラバガニ漁業に関する日米間の取り決めに関する交換 公文 (1964 日・米)
北洋カニ	430千箱 (1967)	オホーツク 224千箱 ベーリング 163 " オリュートル 43 " (1967)	母船 4隻 " 2 " " 1 " (1967)	
北洋底魚	1,221千トン (1967)	ベーリング 739千トン 西カム 16 " アラスカ湾 107 " 北洋トロール 442 " (1967)	母・船 14隻 独航船 184隻 " 3 " " 33 " " 10 " " 20 " 北米西岸母船 3 " " 20 " (1967)	
遠洋トロール (南方)	281千トン (1967)	アフリカ沖 174千トン ニュージーランド 3 " 北米東岸 一 オーストラリア 1 " アデン湾 一 南米ギアナ(エビ) 0.5 " (1966)	69隻 5 5 1 10 } 91隻 (内エビ10隻) (1968許可数)	北西大西洋漁業のための国際条約(1950 13ヶ国 日本未加入) 北東大西洋漁業条約(1963 14ヶ国 日本未加入)
捕 鯨	21,088頭 (1967)	南水洋 9,458頭(1966/67) 沿岸 3,287頭 (1967) 北洋 7,318頭 (1967) 小型捕鯨 1,024頭 (1967)	4船団 (1966/67) 18隻(捕鯨船) (1967) 3船団 (1967) 17隻(捕鯨船) (1967)	国際捕鯨取締条約(1948 18ヶ国) 南水洋捕鯨規制取締(1963 5ヶ国) 北太平洋4ヶ国コミッショナー会議(1964 4ヶ国)
オットセイ	0	0	0	北太平洋におけるオットセイの保存に関する条約(1957 日・米・加・ソ)
註) 多数の沿岸国が右欄に示す海洋条約に加入しているので、国際漁業は著しい制肘をうけているが、今後益々この傾向は強くなることが予想される。				領海及び接続水域に関する条約(1964) 公海に関する条約(1962) 大陸棚に関する条約(1964) 漁業及び公海の生物資源の保存に関する条約(1966) } 日本未加入

# 施設の概要

## 1. 所在地

本 所 清水市折戸1,000番地  
北洋資源部 函館市東川町1の2  
焼津分室 烧津市中234

## 2. 施 設

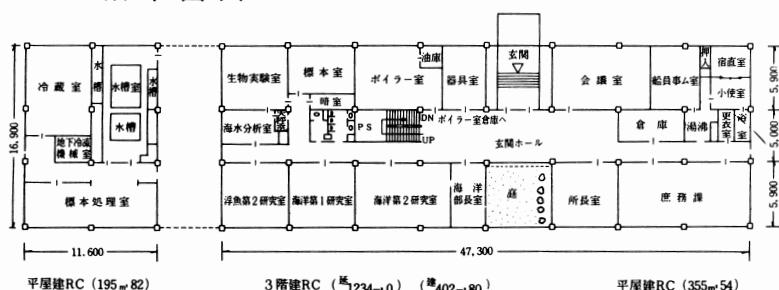
敷 地 9,558平方米  
庁 舎 事務棟 鉄筋コンクリート  
平家建 355平方米  
研究棟 鉄筋コンクリート  
3階建 402平方米  
(延 1,234平方米)  
附属棟 (水槽室 冷蔵庫 魚体処理室)  
鉄筋コンクリート平屋建 195平方米  
宿 舎 A 棟 鉄筋コンクリート4階建 32戸 延 1,846平方米  
B 棟 鉄筋コンクリート4階建 24戸 延 1,103平方米  
C 棟 コンクリートブロック2階建 4戸 延 203平方米



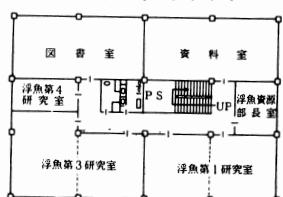
富士を望む庁舎と宿舎

## 庁舎平面図

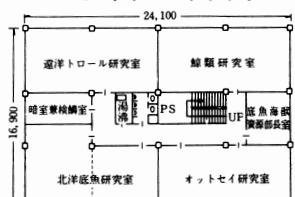
### I階平面図



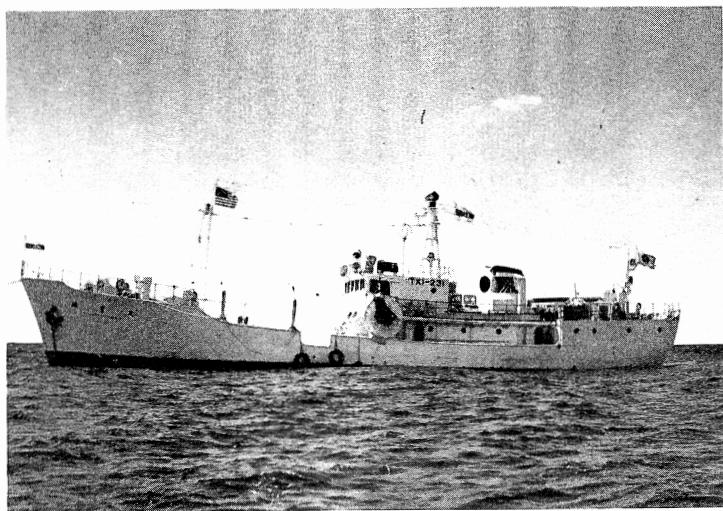
### 2階平面図



### 3回平面図



# 俊鷹丸



ウェーク島における俊鷹丸

## 主要々目

### 主な調査航程

鋼 船

総屯数 185.61トン

(長32.01 幅6.30 深3.15m)

機 関 主機 ディーゼル400HP 1基

補機 ディーゼル 50HP 2基

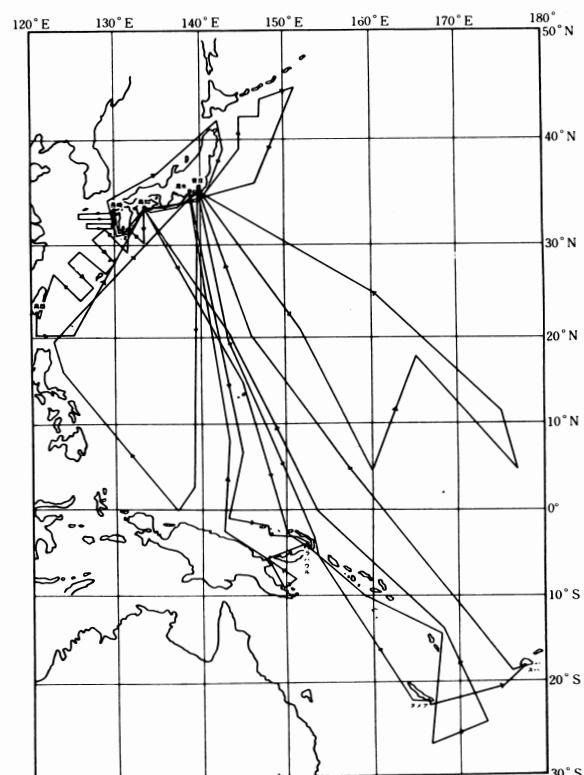
設 備 冷凍装置, 無線機, 方向探知機,

レーダー, 魚群探知機,

ロラン, 電動測深機など

建造年月 昭和32年3月

乗組員 20名



**Far Seas Fisheries Research Laboratory --February 1969--**

**Backgrounds and Outline of Research**

**Director Hiroshi Yabe**

These ten years the Japanese fisheries have greatly expanded their activities all over the world into international fishing grounds and come increasingly under international fishery regulations.

The Japanese longline fishery for tunas now covers all of the Pacific, Indian and Atlantic Oceans, not only their subtropical and tropical waters but southward to 60° S. for southern bluefin. Generally speaking, most of the tuna stocks except skipjack appear to be almost fully exploited, but fishing efforts by other countries have been still increasing and recently surface fisheries for young have rapidly developed in some parts of the ocean. And possibly as a first step for international management of tuna fishery, the Atlantic Tuna Convention will enter into force just upon another deposit of instruments of ratification.

The high sea fishery for Pacific salmon has developed since 1952 in the northwest North Pacific and in the western Bering Sea. These high sea stocks are anadromous fish populations migrating upstreams for spawning in the territories of the United States, Canada and U.S.S.R. as well as in northern Japan. Effective conservation of them evidently depends on close cooperation of these countries concerned, and the regulatory measures upon scientific findings are annually discussed and recommended to the governments by respective international fishery commissions.

The bottomfish resources along the continental slope in the North Pacific have been rapidly exploited to the Gulf of Alaska by the Japanese and the Soviet mothership fleets since late fifties. A joint conservation measure has been taken for halibut in the eastern Bering Sea since 1964 among Japan, Canada and the United States. The Japanese trawl fisheries have also extended to the Atlantic, especially off the west coasts of Africa and in the Northwest Atlantic, and international cooperation in research will soon be intensified as a basis for sound fishery management.

Research and conservation of fur seals in the North Pacific, once depleted but having remarkably recovered, are annually coordinated by the International North Pacific Fur Seal Commission. Rational recovery of the whale stocks in the Antarctic and effective management of whaling in the North Pacific are urgent tasks of the International Whaling Commission, in which Japan has to play a positive role as one of the leading whaling countries.

With these international situations in mind and to develop the Japanese far seas fisheries on firm and reasonable basis, this laboratory was established on August 1, 1967. Timely stock assessment for each fishery resources concerned, scientifically sound and internationally persuasive, is one of our main targets. The fisheries themselves are always one of the essential sources of information, catch and effort statistics, coupled with biological information provided by cooperation not only of commercial vessels but of the research vessels of local governments and fishery schools, and supplemented by field works of our own research staffs. Our contributions are published as Bulletin of the Far Seas Fisheries Research Laboratory. The laboratory is organized as follows:

Director: Hiroshi Yabe

Administration Office

Chief: Yotaro Tanabe

Research Planning & Liaison Office

Chief: Yoshio Fukuda

Senior Scientists by Investigation:

Division of Pelagic Resources

Chief: Akira Suda

Yellowfin & Southern Bluefin

Sigeiti Hayasi

Tuna & Billfish Ecology

Shoji Ueyanagi

Albacore & Bigeye Tuna

Shoji Kikawa

Division of Groundfish and Marine Mammals

Chief: Osamu Kibesaki

North Pacific Groundfish

Yoshiya Takahashi

Deep-sea Trawl Fishery

Ikue Ikeda

Fur Seals

Tadayoshi Ichihara

Whales

Seiji Ohsumi

Division of North Pacific Resources\*

Chief: Yoichi Yabuta

Research consultant: Teruo Ishida

Salmon

Tamotsu Yonemori

King Crab

Masakazu Kawasaki

Salmon Ecology

Susumu Sano

Division of Oceanography

Chief: Ichiro Yamanaka

Dynamical Analysis

ditto

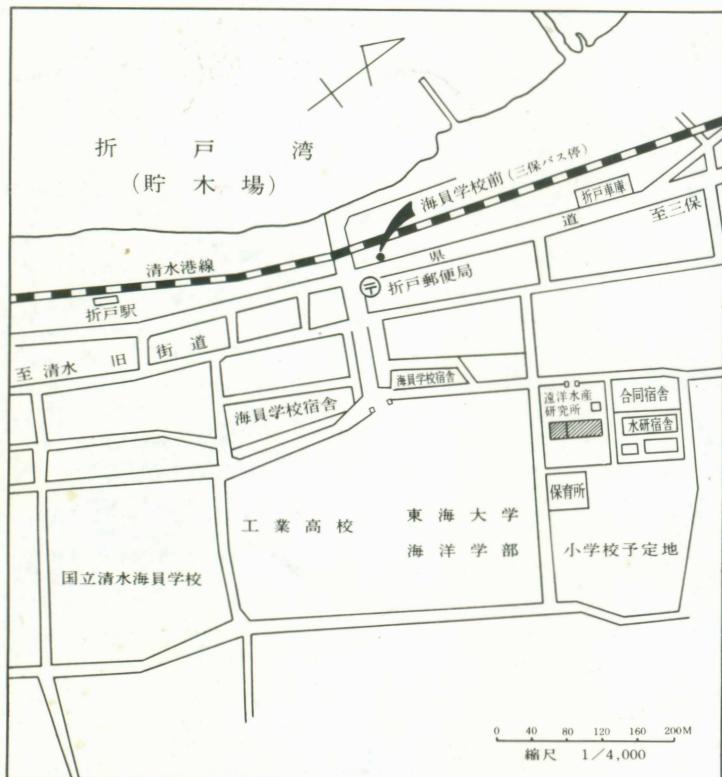
Environments

Hajime Yamanaka

---

\* This group of staffs will be stationed until 1970 at Higashikawa-cho, Hakodate, Hokkaido as a branch of this laboratory.

## 案 内 図 清水市折戸1,000番地



位 置 清水市折戸1,000番地

電 話 清水 <0543> 34-0715

テレックス 3965-689 エンヨウスイケンSM乙

経 路 国鉄 清水駅または静鉄新清水駅下車

バ 斯 静鉄バス三保線 海員学校前（東海大学前）

下車徒歩5分

